Sophia-R
Sophia University Repository for Academic Resources

Title	二〇二一年度（第48回）連続講演会シンポジウム「茶道とキリスト教」
Author(s)	竹内，修一/椿，巌三/田中，裕/スムットニー，祐美
Journal	キリスト教文化研究所紀要
Issue Date	2022-03-16
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	Publisher
URL	https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20220314006
Rights	

上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

二〇二一年度（第48回）連続講演会シンポジウム

「茶道とキリスト教」

提題者　椿　巌三
　　田中　裕
　　スムットニー　祐美
司　会　竹内　修一

竹　内　それではこれから、一時間ほど、シンポジウムを行いたいと思います。司会を務めさせていただきます、上智大学の竹内です。よろしくお願いいたします。

先生方の方から、他の先生にご質問等がございましたら、まずその辺りから伺ってみたいと思います。

スムットニー　田中先生、講演会が始まる前にお話に出た西田哲学についてですが、私の恩師で京都大学の倉澤行洋先生から、哲学からみたキリスト教と茶の湯との関係についてご教示いただいたことがあります。今でもよく分からないのですが、両者を哲学の精神性からみる場合、何をもって説明できるのでしょうか。資料があれば、これが証拠ですって言えますが、哲学とか思想などは見えないわけですし、人によって捉え

方が違うと思います。何があるからこうだっていうふうに言えるのでしょうか。西田先生、久松先生、そして倉澤先生の哲学を踏まえたキリスト教と茶の湯の精神性、その辺を教えていただけますか。

竹内 それでは、田中先生、お願いします。

田中 今スムットニー祐美先生から倉澤先生のお名前が出て、私は何か縁のようなものを感じます。実は倉澤先生は京都大学の久松真一のお弟子さんだったんですが、久松真一といえば『茶道の哲学』というものがございます。そして、禅が茶道の根本であるという、そういう理解がありました。ここで禅と呼ばれているものは何かということですが、私の理解するところでは、それは仏教の一宗派としての禅宗ではない、それよりももっと深いものです。

「禅」とは、もともと観想ないし瞑想を意味するdhyānaというサンスクリット語を音写した「禅那」に由来しますが、道元禅師が「禅」というときは、釈尊の観想という菩薩行そのものに参ずることを意味するので、禅宗という宗派を越えた仏教の原点です。禅宗といえば、たとえば浄土真宗とは異なる仏教の一宗派だと考える方が多いのですが、そんなことはないのです。茶道の成立に大きな影響を与えた村田珠光は浄土宗の方ですが、浄土宗でも観想を大切にしています。ちなみに「観念」という言葉は、仏教の文脈では本来「観想」を意味するので、人間が頭の中で考えた概念などではありません。枝分かれした仏教の諸宗派の根源にある宗教的経験が「禅」であったわけですが、それを更に徹底させて、いわゆる仏教的なるものすら越えて、一宗一派の教説にとらわれない宗教そのものを成立させる根源――純一なる経験そのもの――を久松先生は「禅」と呼ばれたと思います。そして世俗化した社会にあって「禅」を実践する道の一つとして茶道を主体的に選ばれ、西田哲学を継承しつつ「茶道の哲学」を構想されたのであると理解しています。

茶道の歴史的かつ実証的な研究も大切ですが、それと同時に、茶道の哲学的な省察をするということも重要でした。それも概念的な哲学ではなく、一つ一つの具体的な個物との出逢い、人と人とが顔を合わせる一期一会の邂逅にもとづく経験の現場に立ち返る省察が「茶道の哲学」と言うことになるでしょう。そこにおいては、個人個人が皆違いながらも根底において一つであること、各人が他の人とは違う個性を発揮することが求められました。

私の場合は、そういう形での久松先生の「茶道の哲学」をキリスト教、とくにカトリックの典礼解釈に結び付けて考えました。カトリックの霊性の伝統の中には、ベネディクト修道会やイグナチオ・ロヨラに由来する霊操の伝統があり、門脇神父がすでに指摘されたように、これは最も広い意味での「禅」に対応するものです。世俗化し多元化した現代社会のただ中で、純一なる「禅」を実践した茶道の伝統から学ぶことの意義は大きいと思っています。

また、茶道にかぎらなくても、私たちが日常の生活、自分自身が専門としているような仕事の中で、その精神を受け継ぐことは可能なのではないでしょうか。

例えば岡潔は数学者ですけれども、数学の研究に只管専念しているときに、彼はそういった純一なる「禅」の経験をしていたと思います。どんな業務に従事していても、そこでキリスト教にも通じる「禅」の道が実現されるのではないかと、こんなふうに思います。

スムットニー　ありがとうございました。

竹　内　ありがとうございます。先生、よろしいですか。

スムットニー　はい、十分に分かりました。

竹　内　では、田中先生のほうから、どなたかにお聞きしたいことがございますか。

まず、スムットニー先生にお聞きしたいのですが、やはりヴァリニャーノの考え方の基礎にあるものは何かと言うことです。さしあたっては、日本の文化の特徴をよく理解して西洋の考え方を押しつけるのではなく、宣教される側の主体性を尊重して布教活動をするという基本方針をとったと理解しています。そこで、適応主義の三段階と言う場合、三番目の段階がとても大切で、それが『南方録』にあるような茶の湯の礼法規則に見事に対応しています。わずかの期間しか日本に滞在していないヴァリニャーノがこういう日本文化の優れた理解を示すことができたのは、大勢の日本人のイルマンたちの協力があったのではないかと推察します。表には出てきませんが、彼の協力者が大勢いて、なかでも特に利休の高弟であった高山右近などは非常に重要なのではないかと思いますが、この点は如何でしょうか。適応主義の布教を可能にした茶の湯者についての史的な資料について、更に詳しく教えていただきたいと思います。

それから、椿先生が今日持ってこられた具体的な茶器と作品に感銘を受けるとともに、茶を飲むということが宇宙を飲むことに繋がるという先生の言葉にも大いに共感しました。茶の湯で尊重される名物、名器はみな固有名と歴史的由来を持つ個物です。これを手掛かりにして考えますと、名物名器でなくとも、ここにあるありふれた一つ一つの「物」もまた、現代科学の言葉を使うならば、百数十億年前に始まったビッグバン以来の宇宙の歴史を背景にして成立した掛け替えのない個物だといえるのではないでしょうか。私たちはそういう宇宙の歴史的背景のもとに「個物」があるということに気づきません。椿さんが引用されているギリシャ正教に由来する言葉もまたすばらしいと思いました。茶の湯は tea ceremony とか tea cult とかいうふうに訳されますが、私は宇宙的典礼 cosmic liturgy と訳すのが良いと思っています。このように茶の湯と典礼との結びつきを考える示唆を与えられたこと、陶芸の道を通じてカトリックのミサ典礼の素晴らしさを再確認できたことなど、椿先生のお話にまことに感銘を受けました。

竹内　ありがとうございます。スムットニー先生、最初のご質問に対して、いかがでしょうか。

スムットニー　ヴァリニャーノが茶の湯の規則を作成できた背景には、日本人の協力があったのではないかとのご意見、私もそのように考えています。そうですね、イルマンに限らず、先ほど提示した一五九五年の一一月二三日ゴア発、ヴァリニャーノから総長宛ての書簡で、修道院での接待が大変無作法であると、九州のキリシタン大名三名（有馬晴信、大村純忠、大友宗麟）から指摘されたということを申し上げました。その続きとして、ヴァリニャーノは宗麟が改善のための助言も与えてくれたとも明記しています。つまり、宗麟はヴァリニャーノの協力者の一人であったことが確認できます。余談ですが、ヴァリニャーノがほかの書簡で宗麟所持の「似たり茄子」という茶入を見て、鳥の餌を入れる容器にしかならないなんて記した資料もありますね。それから一五八〇年から三ヶ所で開催された協議会の参加者名簿に示す二六名の神父さまたちの顔ぶれをみますと、ルイス・アルメイダやルイス・フロイスの名前が載っていますし、信長にセミナリオのための土地を交渉したオルガンティノの名前も列挙されています。ですから、日本人以外にもそういったヴァリニャーノが来日する以前の豊富な在日経験を持つ神父さまたちが集まって、ヴァリニャーノに日本の習慣や礼儀作法などについて助言をした、それも言えるのではないでしょうか。

竹内　利休の弟子の中には、複数のキリシタン大名がいましたよね。彼らの働きについては、どのようにご覧になっていますか。先ほどの田中先生のご質問ですと、日本人の協力があったからこそ、ヴァリニャーノの総監督としての働きがあったということだったと思いますが。その辺りについて、少し伺えればと思いますが。

スムットニー　はい、たとえば利休七人衆の一人であったユスト・高山右近からの助言、それは大きかったでしょうね。でもその前に、ヴァリニャーノが最初に上陸した口之津を支配していた有馬晴信からも多くのこと

を学んでいたと思います。

本来なら長崎港に到着すべきところ、ヴァリニャーノは口之津港を選びました。今はほんとに静かな町ですが、当時の口之津は繁栄していました。山側には晴信の居城、日野江城があって、城内には茶室があったことを伝える資料があります。近年そこで発掘調査が行なわれ、茶の湯の道具が出土しています。とすると、ヴァリニャーノは来日当初に茶の湯を見て、興味を持ったかもしれません。つまり、利休七人衆の四人のキリシタン茶人たちや九州大名たちもそうですし、とにかく当時は武将や豪商たちが皆、茶の湯をやっていました。そのような様子をヴァリニャーノは認識して、布教のために茶の湯の規則を作ったのでしょう。現代の感覚ではなく、茶の湯がなければ成り立たない、当時はそういう時代だったのです。

竹内　ありがとうございます。椿先生、先ほど田中先生が、先生がレジュメの中で引用されているシュメーマンやデュ・ワールについてご指摘されましたが、この点について、もう少しお話いただけますでしょうか。また、ミサと茶の湯との関係において、特に回し飲みをすることについて、いかがでしょうか。

椿　私の個人的な体験談のような話になりますが、私はデュ・ワールやシュメーマンのことはぜひ知っていただきたいと思います。先ほどは話しきれなかったのですけども。

竹内　それでは、是非、お願いいたします。

椿　デュ・ワールについてはレジュメの最後に著書の一節を資料として添えてありますのでお読みいただきたいと思っています。デュ・ワールはイギリスの国教会の方なんですけれども、イギリスはベネディクトがすごく盛んだったところで、その精神が今も国教会の中にも生きているということです。デュ・ワールさんの『神を探し求めて』という本は、その環境から生まれたベネディクトの『戒律』の実に優れた解き明かしの本だと思います。ドイツのオッティリエンにベネディクトの修道院がありますが、私はそこのオブ

ラーテ（奉献者・在俗修道士）になりまして、私はそれを繰り返し読んで、ベネディクトはこういうこと言っているのかということが、ほんとに知りたいことが知れたような気がしました。その中で、日本の茶道についてこのように目をとめていた視点がすごく新鮮でした。素晴らしい感性、理解力です。今日のテーマの「茶道とキリスト教」ということに重なります。やはり茶をいただくことは礼拝行為なんだっていうことには共鳴と感動があり、茶道とキリスト教を考える上での突破口になってゆきます。

そしてシュメーマンのことですが、二〇年ほど前に亡くなられましたが、ロシア生まれで、アメリカで活躍した、現代を代表する正教会の神父様です。

ＦＥＢＣ放送で東方教会の大阪の神父さまのお話を伺ったときに出合った言葉なのですけれども、人間の立場というのは、神と自然の間にあって、自然界を受け、『豊かさをささげ返す祭司である』ということを聞きまして、素晴らしい理解だと思いました。私は「恵みの受け手として」の思いをもって自然界を神の恵みとして受けながら作陶し、山で暮らしているんですけども、それをささげ返すっていう表現によってほんとに神様と人と自然界がつながったんですね。

田中先生もシュメーマンの言葉を喜んでくださいましたけども。やっぱりこれですね、「人の食物としてのこの世界は物質的な何かではなく、物質的な機能以上のものであり、霊的な機能と異なり対立するものでもなく、（霊肉の二元論ではないという意味ですが）、存在するものは全て神の人への贈り物です。神を知り得るため、また人の命を神との交わりにするための贈り物です」という表現は本然を示していると思います。ほんとにモノをどう受けるか、私は茶の湯やっても陶芸やってもモノとの関わりですので、どう受けていくかっていうのがずっと課題でした。ラウダート・シも根本にあるのは受肉の問題です。キリストの受肉によって、モノが単なる物質以上のものとなった。本来の意味と価値を回復されたものとなっ

たということです。ラウダート・シやシュメーマンによって目の前が晴れたかのようでした。作陶、山暮らし、茶の湯の暮らしに三〇余年の時間を了解でき、励まされる思いでした。

やっぱりコロナっていうのは物質化、人間が物質化してしまった現象の果てっていうのですかね、自然と神様を失ってしまった。人間自身も自分を失って、天地人の調和ということでは、ほんとに三つの調和が、自然界を営利事業のための場、資源として見る物質主義に丸め込まれてしまった結果というのがコロナ禍だと思うんですね。これは自然界を神からの恵みとして、もてなしとして与えられているものとして、もっと自然を大事に受けて人を大事にしていく生き方に帰れという忠告と思われるわけです。そういう意味で茶の湯っていうのは、物質主義ではなくて、自然および神、人間の調和の流れです。一つの素材が選ばれ、作られ、用いられるとき、もてなされるとき天への感謝、讃えは根本にあります。物質主義っていうのはささげ返すっていうことがないわけですね。ものが一つの資源になってしまう、産業の資材になってしまうということだったんですね。人間も産業のための資材になってしまいます。自然界は人間が生存を維持するための素材にすぎなくなってしまいます。

天地人の調和というのは固定されたものではなく、流れの状態です。捧げ返すというのは循環の完成です。人間は自然界と神の間に立ち捧げ返しを行う祭司職だとシュメーマンは言うわけです。血液が体内を巡ってこそ命が維持されるように、真のいのちというものは、こういう流れ、交わりの中にあるということでしょうか。うまく言えませんが。

竹内 先生がおっしゃりたいことは、恐らく、レジュメの二頁にも引用されている、『ラウダート・シ』の二三六かと思います。聖体（ミサ）こそ、真の天地人の調和と一致云々というところです。今回、先生のお話を伺って驚いたのは、この『ラウダート・シ』に言及されている点です。今回の講演会のテーマは、

田中

「茶道とキリスト教」です。ここで、茶道とキリスト教が、「と」によってつなげられていますが、これは、単なる並列ではないと思います。この「と」が、接点なのかあるいは重なり合っているのりしろなのか、と考えました。キリスト教において語られる霊性と、茶道において受け継いでいる霊性は、どのように関係し合うのでしょうか。先ほど、田中先生が、複数の哲学者の思想をご紹介してくださいましたが、あらためて先生に、「霊性」という言葉をキーワードとして、キリスト教と茶道の関係について伺えればと思うのですが、いかがでしょうか。

門脇神父が禅とキリスト教的霊性との結びつきについて「道の形而上学」などの御著書で非常に啓発的な解説をされています。門脇先生はもともと旧制中学在学中に、学校教育の一環として座禅の経験がありましたが、キリスト教に入信されたのちに、イエズス会で霊操の修行をされました。そして、イグナチオ・デ・ロヨラの霊操の本来の意味が、座禅の経験によって自分に披かれてきたのだと回想しておられます。霊操とは身体と心というものが一体となった修行である。だから、キリシタン時代には、「スピリチュアル修行」と呼ばれていました。「スピリチュアル修行」は、その時代の言葉で訳されていますから馴れるまでが大変ですが、日本語の魂を感じさせる名訳です。その根本的な経験の中には、椿先生が言われたように、三つの不調和――自分が自己自身と調和していない、自分と他人が調和してない、自分と自然が調和していない――という現実をしっかりと踏まえた上で、調和の根源である超越者、自己と他者と自然を越えた超越的なるものの促しによって、一歩一歩、この世に調和（平和）を実現してゆくという道程そのものがスピリチュアル修行であると理解できます。イエズス会の皆様には、門脇神父のように、日本の伝統文化の根源にある「禅」の経験を大切にして、それを世界に向けて発信していただきたいと私は思います。私は一介の在俗信徒にすぎませんが、「禅」の根本の精神は、万人に通ずるものがあると思っております。

竹内　ありがとうございます。日本的霊性という言葉は、一般的には、鈴木大拙の『日本的霊性』によって知られていますが、最初にこの言葉を語ったのは、浄土宗の山崎弁栄だと聞いています。先ほど、田中先生が、道元や久松真一に言及されましたが、禅と茶の湯との関係も、大変興味深いところだと思います。

椿　禅と茶の湯ということなのですけれど、この度改めてロドリゲスの『日本教会史』の茶道に関する部分を読み直したのですが、ロドリゲスは当時の茶道が禅に学びながら孤独な隠遁の形式を取り入れたと、宣教師の立場から見て理解したことを詳しく書いております。禅は強い求道心をもって、自然の事象を観照し、第一義の認識に達しようとしており、堺の精通した茶人も狭い地所の中で自然の事象やその第一義への観照を行ったと書いております。茶の湯は一方ではものを介しての心の交流ですから、茶碗や事物の鑑賞に触れ、日本人は光沢もない、自分には粗雑と見える陶器に高額を払って買っている。茶人は器などの拝見にあたり、誉め言葉も出さず黙考し、そこにそのものの持つ神秘さを自身で見出した、とも書いています。個物に対しても真剣な禅的というべき見方がなされていたことが見えると思います。

竹内　ありがとうございます。

椿　ものを通してそこから本質や第一義に達するという問題は先ほどの西田哲学の流れとも関係してくると思うのですが、ヨハネパウロ二世が、物品そのものも人を神に昇らせてゆく神の愛のしるしといっております。自然やその事象、個物を介して神に至る霊性というものは、自然や自然素材、手仕事が失われつつある現代において改めて問われるべきテーマではないかと思うのですが。

竹内　恐らく、田中先生の発表の中では、無差別智という言葉が出て来たかと思います。あるいは、西田の語る知的直観という、分別を超えた知り方だろうと思いますが、やはり、そういうことを据えない限り、椿先生がおっしゃられた宇宙を飲むということは、理解できないのではないか、と思います。小さな茶室が小

宇宙である、と言われます。宇宙が、凝縮されている、といった感じでしょうか。一五世紀のニコラウス・クザーヌスが、同様のことを語っています。

スムットニー先生のご発表のタイトルは、「適応主義にみる安土・桃山時代の茶の湯」となっています。この「適応主義」は、積極的に理解していいのでしょうか。一六世紀に日本に来た宣教師たちが、日本の古典を使ってキリスト教を教えた、と聞いています。このセンスは、すごいものだと思います。日本においても、半世紀ほど前から、インカルチュレーションという言葉が使われていますが、その辺りと適応主義とはどのように関係するのか、気になるところなのですが。

スムットニー　私も気になります。今でいう「適応主義」ですね、ヴァリニャーノが行なった日本の文化や習慣などを採り入れた宣教手段を、現代では「適応主義」と呼んでいます。ヴァリニャーノは日本の様子がヨーロッパや今まで布教してきた場所と全く違う、ヨーロッパの習慣と全く反対であるって、書簡に記しています。当初から困っちゃったのですよ。どうやって日本で布教すれば良いのかって、ましてや言葉も分からないのですから、つまり、ヴァリニャーノは必死になって布教の糸口を模索していたのですね。そのようなとき茶の湯を発見したのです。ヴァリニャーノは茶の湯に出合ったとき、さぞかしうれしかったでしょうね、たとえば信長の茶の湯に与ったとき、礼儀作法や所作を見て、これだって思ったでしょうね。そしてヴァリニャーノは聖職者ですから、ミサのことを考えたでしょうね。

このことは資料には記されていませんが、茶の湯の所作や進行がミサに似ていると感じたのではないでしょうか。実際に似ていますよね。但し、茶の湯を用いてミサをした、それは成り立ちません。もしそうであるならば、ヴァリニャーノはそのことをどこかに記していたはずです。そのような資料を私は見たことがありません。話を適応主義に戻しますと、茶の湯は宣教方針に適する日本の習慣だったということで

す。茶の湯があって良かったですね。それも信長・秀吉の茶の湯と利休のわび茶という最盛期の茶の湯を、ヴァリニャーノは目撃したのですから。特に一五九〇年の第二次視察はわび茶が大成されていました。利休は一五八〇年頃から茶の湯の簡素化に着手して、一五九一年二月に秀吉の命で切腹しました。ヴァリニャーノはわび茶が人々の間で嗜まれていることを認識して、第一次視察では行われていなかった精神性を本位とする茶の湯にも共通する規則を加筆したのでしょう。それが「茶の湯者規則」や「禁制」などです。このことは布教地の状況に順応した宣教という、適応主義の定義からも言えると考えます。

竹内 ありがとうございます。他の先生方、もし何かございましたらどうぞ。

田中 今、竹内先生が言われましたように、日本の古典の言葉を使って教義を説いたっていうのは、やはりヴァリニャーノが印刷機を持ち帰ってきて、ヨーロッパの古典だけではなく、日本の古典をも大切にしたことですね。

竹内 『太平記』ですね。

田中 『太平記』の抜き書きをローマ字化して、そして出版している。これは大変に大きな意味があったのではないでしょうか。『太平記』は、客観的な歴史書であるわけではなく大衆向けの物語なんですが、しかし大勢の人に読まれていて、当時の人々のものの考え方が非常によく分かる。時間がなくて申し上げられなかったのですが、『太平記』の楠木正行の惜別の辞を、高山右近が細川忠興に贈っています。当時は、文字の読める人の一般的な教養として大切な物語であったと思います。キリシタン時代よりもずっと後の明治時代になりますが、内村鑑三が米国に行くときに忍ばせていった本の一つも『太平記』です。これはあんまり知られていない事実ですが、『太平記』は、忠義を重んじる武士の教養としての必読書であると同時に、米国にキリスト教を学びに行くときでも日本人の心を忘れないために携帯した書物でした。

高山右近の場合も、内村鑑三の場合も共通して言えることは、地上の権力者に忠誠を尽くすと言うことを拒否したところにあるでしょう。権力者が交代すれば人々は、その時々の主君の心を忖度して右往左往するだけです。本来の意味での忠義ないし至誠というものは、万人を救済するために十字架につけられたイエスの他にはない――そういう意味での至誠を首尾一貫したところに日本のキリスト者のひとつの道がありました。

千利休の場合は、彼自身はキリシタンではなかったわけですが、しかし弟子たちがキリシタンになることを認めるだけの度量があった。しかも利休の茶の湯は、弟子が師匠の物真似をすることは好まなかった。弟子がまことに師と一つになるためには、師を超えていかなければならない。そういう意味での非常に包括的な「禅」が利休の茶道の根本にあります。

利休の木像が十字架につけられ、秀吉により死を賜り、切腹を命ぜられ、斬首されてその首が十字架の足元に晒されたというのは歴史的事実です。「和敬静寂」を重んじる茶の湯の創始者が、権力者に阿諛追従しない道を選んで賜死を避けなかったこと――これについては、チースリック神父が『高山右近史話』という本の中で指摘していますが――私は高山右近のキリスト教的至誠の心が日本の茶の湯の成立に影響したと思っています。

竹内

ありがとうございます。かつて、今道友信先生が、『美について』という本を書かれました。その中で、先生は、人間が美を感じる場合には、段階、あるいは深まりのような過程がある、と語っています。まず、美しいものに反応する感覚がなければ、美を捉えることはできない。しかし、人間は、ただ単にきれいと感じるだけにとどまらず、その感覚に深みが増すにつれて、精神的にもそれを味わうことができるようになる。換言すれば、美は、きれいといった単なる感性のレベルを超えて、より深い次元で捉えることが可能であ

る、と語られます。そこにおいて捉えられる美とは、恐らく、いのちがそこにおいて真の安らぎを得ることができる、そのような人間の生き方において現れるものなのではないか、と思います。茶の湯における、凛とした端正な美は、やはり多くの人が惹かれるポイントなのではないか、と思います。キリスト教の一番深いところにも、そのようなものがあって、それが、霊性あるいは祈りという言葉で語られるのではないか、とも思います。

〝美〟という文字は、「羊」と「大」によってなっています。「羊」には「犠牲として捧げる」という意味があり、それに「大きい」という字が加わることによって、〝美〟という文字になります。すなわち、〝美〟には、最大限の犠牲を伴うという意味があるのでしょうか。人間関係において犠牲を払うとき、それは、無私の心あるいは献身的な心で相手に仕えるということなのでしょうか。それによって〝美〟は生まれる。このように〝美〟は、最終的には、一人の人間の生き方そのものによって生まれてくるものではないか、と思います。茶道においてもキリスト教においてもそういった突き抜ける、何ていうのかな、そういった素朴で単純な真っ直ぐな心、清廉な心がなければ、本当の美は生まれてこないのかもしれません。

スムットニー　美といえば、利休が晩年に長次郎に作らせた楽茶わんですが、信長の時代の唐物や室町ブランドとは全く異なる、わび茶にふさわしい素朴な美しさが表現されています。ところが秀吉は長次郎の茶碗を嫌らっていました。博多の豪商で神屋宗湛による『宗湛日記』という茶会記には、「黒キニ茶タテ候事、上様御キライ候ホトニ」と書いてあります。秀吉と利休の茶の湯に対する美意識とが、完全に違っていたっていうことです。利休の追求した美こそが、キリスト教につながるのではないでしょうか。

竹内　何ともいえない、利休のあのそぎ落とした美ですね。今、思い出したのですが、かつて、勅使河原宏監督による「利休」という映画がありましたが、よかったですね。

それでは、そろそろ時間となりましたので、これで、今回の講演会ならびにシンポジウムを終わりにしたいと思います。先生方、またご参加された皆さん、ありがとうございました。